

の中から得たものはあまりない。

自らの生残に夢中になれば、その生残の障害となっている物にも当然大きな関心を寄せることになる。かつては、陸地とか、気候など、外部的なものが障害物として書かれたが、のちの作品では、障害物は不明瞭で、しかも内向化する傾向がでてきた。障害物はもはや肉体的生残に対するそれではなく、精神的生残とでもいえるもの、人間として生きていく上でぎりぎりの生命に対する障害物としてとらえられるようになったのである。ときにはこのような障害物に対する恐れそのものが障害物になり、登場人物は恐怖(外部から彼に迫っている)と彼が考えている(もの)に対する恐怖、あるいは内部から彼に迫る自分自身の性情に対する恐怖)にとらわれていく。彼らが恐れるのは命そのものかもしれない。生命が生命にとって脅威になると、そこにはいささかの悪循環が生まれる。例えばある男が、足を切断して不具になるしか生きながらえる方法はないと考えたとしたら、サバイバルの代価はきわめて高くつくことになる。

分かり易いように、いくつかのカナダの小説の筋を要約してみた。その中には、生き残ろうとして失敗してしまうものもあるし、ただ生き残るだけのもの、生き残るけれども不具になってしまうものもある。

ブラット著「タイタニック号」船が氷山に衝突し、大半の乗客が溺死してしまう。

ブラット著「アレポーとその修道士たち」打ちひしがれるような苦しみを

へた牧師たちが、つかの間生きのびるが、インディアンに皆殺しにされる。

ローレンス著「石の女神」老女が命に取りすがるように生きてあと、とうとう死んでしまう。

キャリア著「お日様かい、ファイルート」田舎での信じがたい貧困と都会での恐ろしい状況を逃れた主人公が、金銭的に成功しかけるが、車をぶつけて死んでしまう。

マーリン著「死の肋骨の下で」財政的な成功を取めるため自分を精神的に不具にしてしまう主人公が、結局失敗する。

ロス著「私とわが家」自分の仕事を嫌がりながら、それを続けることによって自分を芸術的に不具にしてしまう大平原の牧師が、最後にそこから逃れるおぼつかない機会を与えられる。

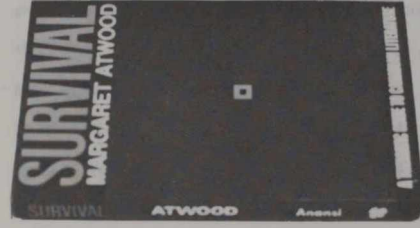
バックラー著「山と谷」書けない作家が、最後に可能性を見出すが、実行する前に死ぬ。

ギブソン著「コミュニオン」人間的接触のできなくなった男が、病気の犬を助けようとするが、失敗し、最後に焼死する。

私が例にあげた筋書きは、小説と詩の両方から選んだものである。しかもカナダのいろいろな地域にまたがり、年代的にも一九三〇年代から七〇年代初期に及んでいる。これらの作品の筋書きは、生存に失敗するとか、ただ生存するだけでそれ以上は何も達成し得ないということが、敵対的な外部世界に押しつけられるのではなく、むしろ自分自身の選択でそうなるという、サバイバルのもつもうひ

とつの側面をどこかで示唆する。生存ということにこだわりすぎると、そこから生存しないという意志が生まれるかもしれないのである。

カナダの作家が、主人公を死なせるか、失敗させるよう、いろいろと心をくたく、ということにははつきりしている。失敗以外に「正しい」結末はあり得ない、それだけが作中人物(あるいは作者)の宇宙観を支持するのだという、意識的または無意識な考えがあるため、失敗させることが絶対に必要なのだということが、カナダの多くの文学作品から感じられる。このような結末がうまく扱われ、しかも作品全体にマッチしておれば、文芸的にその是非を云々することはできない。しかし、カナダの作家がきこちない、あるいは手のこんだ結末を書く場合は、その処理の仕方は肯定的ではなく、否定的な



方向であることが多い。つまり、カナダの作家が創作する主人公には、突然金持ちの叔父さんから遺産がころがりこんだとか、本当は伯爵の息子だったというヒックリする知らせよりは、予想もしなかった災害が起こったり、車の操縦がきかなくなったり、あるいは木や鷹役の人物がでてきて、主人公が「無事に」失敗することの方が多い。なぜこうなるのだろうか。カナダ人には、アメリカ人のもつ勝利への意志と同じほど強く、また広く

浸透した失敗への意志があるのだろうか。

あるいは、カナダ文学の大半は一〇世紀に入ってから書かれた、そして二〇世紀は一般に悲観的または「アイロニツクな」文学を生んだ——カナダはただその傾向を反映したに過ぎない、と言えるかもしれない。また、人生の喜びや楽しみについて、短い叙情詩を書くのは可能でも、ちよつとした長さの小説であればこれだけでは物足りない。純粋な幸せについて述べた小説は、非常に短くでもしなければ、アクビがでてしまう。「昔々、ジョンとメリーはそれからずっと幸せに暮らしました。終り」でいいのだ。今述べた議論は、両方ともあるていどの的を射ている。にもかかわらず、カナダの裏うつは、他の国々のそれと比べて救いが少なく、死と失敗があまりに多くの割合を占める、ということにある。いろいろなシンボルには、例えば生命の源としての海もあれば船のみ込む海もあり、また成長を示す意味の木もあれば頭上に倒れる木もあるというように、肯定的なものや否定的なものがあるが、カナダ人がそのどちらかを選ぶとなると、否定的なものに対する好みの方が明らかに強い、ということがいえよう。

(Margaret Atwood: Survival, House of Anansi Press Ltd., Toronto, 1972より抜す。マーガレット・アトウッドはカナダで最も有名な詩人、作家の一人で、小説「The Edible Woman」「Surviving」「Lady Oracle」、詩集「The Circle Game」「Procedures for Underground」「Power Politics」「You Are Happy」などの作品がある。)